

超高齢社会における地域の対応と 若者の還流による効果を求めて ～対馬市における地域包括ケアと域学連携の取り組みより～

要旨

JA共済総合研究所では、大学や他の研究機関とも連携し、長崎県対馬市において持続可能な地域づくりに向けた様々な活動を行ってきた。セミナーのテーマである「地域包括ケア」と「域学連携」はそれぞれ異質の取り組みであるが、対馬では子どもや地域に入った大学生など若年層の参加により、相乗効果が生まれている。すなわち高齢者は子どもや学生と触れ合うことで生きがいを持ち健康になる例が見られ、学生も都会とは異なる環境で多くの学びを得て、さらに研究と両立させながら定住する若者もあらわれている。

これまでの対馬では、高等教育機関や公共交通機関の未整備により、若年層の流出を引き起こし、高齢者の社会参加を妨げていたことが課題であった。教育のあり方が変化し、新技術も次々に生まれているなかで、これからの対馬は島内外の人々の参加によりさまざまなアイデアを生み出し、ひいては日本全体にとって希望の持てる存在ともなれるだろう。

1. 対馬での4年間の取組み

川井真（以下、川井）…前半のご報告・ご講演を聴いていただければおわかりのとおり、今回のセミナーでは結構リアルなお話を取りあげています。JA共済総合研究所は対馬での活動を始めて、ちょうど4年を終えるところです。2014年、初めてわれわれはプロジェクトとして対馬に足を踏み入れたわけですが、この年はちょうど、政府の中に「まち・ひと・しごと創生本部」が発足し、長期ビジョンと総合戦略が閣議決定された年でもあります。^(*)われわれが対馬についての調査・研究を始めたのはそれよりも数年前なのですが、その過程で、たぶんここは日本にとって、そしてわれわれの研究フィールドとして、とても大切にしなければならぬ場所になるのではないか、という予感がありました。それ以来4年間、今回ご出席いた

だいた比田勝市長をはじめ、島の皆さまと二人三脚でいろいろな取組みをしてまいりました。今日の短い時間の中では全てを伝えきれないかもしれませんが、できる限り情報提供をさせていただきますと思います。

それでは登壇者をご紹介します。現地報告をいただきました対馬市の桑原直行先生と前田剛さんです。そして基調講演をいただきました西村周三先生です。

西村先生には、個人的にはもう20年以上もお世話になっておりまして、対馬にも何度か足を運んでいただいております。「対馬でいま地域再生に取り組んでいるのですが、先生も一緒に行きませんか」とお尋ねしましたら、「あ、いや」とおっしゃってくださいだったので最初で、それ以来、失礼ながらご迷惑ばかりおかけしています。しかしながら、その活動を通じてお互いにいろいろな気付きや学びがあり、そこから

またフィードバックをいただいで：という形で、ご指導とご協力をいただいております。

またここからは主催者を代表し、先ほどご挨拶申しあげました当研究所の内藤邦男理事長、そして対馬プロジェクトを主体的に引っ張ってくれている高木英彰研究員も加わります。どうぞよろしく願います。

最初に一言、このシンポジウムあるいはセミナー全体のタイトルについて念のため申しあげます。特に副題には「対馬市の地域包括ケアと域学連携」と、質の異なるテーマを並べて掲げてみました。地域包括ケアと域学連携は、たしかに完全に別々の、異なる取組みと捉えられがちです。これらが一つの枠の中に一列に並べられてしまうと、対馬で何をやったのかということが届きづらくなるのではないかと、当研究所内部でも心配いたしました。しかし、現地報告と基調講演を聴いていた皆さまには、こ

れが何を意味し、このセミナーで何を伝えたいのかはおわかりいただけたかと思えます。

なぜ若い人たちの還流が大事なのか、またそれが地域包括ケアとどのような関係があるのかについて、もう少し整理しておきたいと思えます。桑原先生のお話、そして西村先生が補足をしてくださいましたが、そもそも地域包括ケアとは、最終的には住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための町づくりのことです。町の機能でまず大事なものは何かというと、そう、医療と教育は要になります。そこで今回のセミナーでは、町づくりのなかでも非常に分かりやすい二つの取組みとして、地域包括ケアと域学連携を抜き出してみました。

セミナー全体を見ていただければおわかりのとおり、地域再生、町づくりという小さな活動を通して、持続可能な日本の未来をデザインしていく、そのためには、これから各地方自治体

がどのような取組みをしていけば、日本がより力強い、元気な、夢と希望を抱けるような国になっっていくのだろうか、それを他人ごとではなく自分ごととして問い直していただけるようにしたいと思いい、この二つのテーマに絞って開催した次第です。

シンポジウムに入る前に、今日是对馬での活動に参加してくれている学生たちも会場にきていますので、私から一言、希望の持てるサブライズ報告をしたいと思えます。実はわれわれが4年前に対馬に入ってから、研究分野の異なる四つの研究所の連携体制をつくってきました。

はじめは、われわれJA共済総合研究所と「明治大学 野生の科学研究所」が共同で調査をはじめました。明治大学特任教授、思想家で文化人類学者の中沢新一先生が所長を務めている研究所です。そこに私が所長を務める「明治大学社会イノベーション・デザイン研究所」が参画

しました。そのあとに今度は産業界から、大手企業が15社、ベンチャー企業も含めると50社以上が集まって共同研究を行う「ウェルネス・ライフサイエンス研究所」が参画したのです。この四つの研究所が入れ代わり立ち代わり対馬を訪れ、そして協力し合いながら、対馬を活性化するために何をしたらよいかについて研究を続けてきたわけなのです。

その過程で、実は大きな動きがありました。特に昨年あたりから、私が無理やり誘ったようなところもあるのですが、明治大学の学生たちが何人も対馬に入ってきてくれました。それがきっかけとなって、明治大学の土屋恵一郎学長と対話をする機会も増えたのです。土屋学長とは15年来のお付き合いになりますが、以前から雑談のなかで、大学が主導する地方創生のあり方を探り、日本の未来に向けて、たしかな社会イノベーションを起こしたいね、といった話を



川井 真

していたこともあり、対馬への学生還流がきっかけとなって、明治大学としての協力も得られることになったのです。そこでサプライズですが、実は明治大学は対馬に分校をつくる用意があり、2018年度から始動することを、この場を借りて発表いたします。その先遣隊、先陣部隊として、まさにそこに座っている明治大学の学生たちが、われわれとともに対馬でいろいろな活動を推進してくれていたのです。のちほど学生たちからも発言してもらおうと思います。では、まずは先ほど時間の制約で基調講演を短くまとめくださった西村先生から、シンポジウムの方向づけとして口火を切っていただこうと思います。

(*1) まち・ひと・しごと創生本部首席官邸ウェブサイトを

https://www.kantei.go.jp/headline/ohkou_sousei/

(*2) 明治大学 野生の科学研究所ウェブサイトを <http://sauvage.jp/>

(*3) 明治大学 社会イノベーション・デザイン研究所ウェブサイトを

<http://sid-neiji.info/>

(*4) ウェルネス・ライフサイエンス研究所ウェブサイトを

<http://wellness-lifescience.com/>

2. 偏差値教育から アクティブブリーニングの時代に

西村周三（以下、西村）：私は地域包括ケアのほうで専門で、隣に桑原先生もいらっしやいますが、ここではいま発表のあった大学あるいは分校を対馬でつくれるかどうかについて、話を持っていきたいと思えます。日本中にはいろいろな大学がありますが、大学はこれまで、だいたいご想像がつくと思えますが、学内にこもって教育・研究をしていることが圧倒的でした。ここ10年ぐらい、正確にいうと国立大学が法人化したところからでしょうか、大学が地域に出ていくという話が始まりました。私は10年近く前、京都大学の副学長を務めておりましたが、大学のあり方、あるいは研究や教育のあり方も大きく変わってきました。その後、大学自体が、教育の方法や内容を大きく変えてきたと認識して

います。

大学の分校ができるということは、従来とは異なる新しい勉強の仕方、学び方に転換する時代が来たという意味だと思えます。私は司会者でもないのに勝手に振って申し訳ないのですが、前田さんのご意見を聞きたいと思えます。若年層が島外に流出するきっかけとなる親御さんの考え方には、大きく分けて二種類あります。一つは地元に戻ってきてても仕事がない。もう少し正確に言うと、農業・林業・水産業ではなく、いわゆる大企業をイメージしたお金儲けということです。要するに、親御さんは子どもたちを安定した大企業に就職させたい。そうすると対馬には雇用がないので島外に出るといった話がありました。

もう一つは、これからかなり変わっていくと思うのであえて強調します。偏差値に価値を置いた教育では、偏差値が高い大学のほうがいい



西村 周三氏

大学というイメージが定着しています。ところがいま、大学では教育の仕方が大きく変わってきています。これでもきたら前田さんに少し補足していただきたい。これまでのように、先生が一方的に生徒に教える教育から、例えばアクティブラーニングといった学生の主体的な学び、自分からやりたいと思つて勉強するしくみに変わってきています。私はそれがかなり近い将来、偏差値教育からアクティブラーニングのできる学生が社会でも評価されるようになってくると思います。地域に大学があると人口流出が防げるというデータもありますが、^(*)これからの対馬だけでなく、日本全体で大学の誘致や接触を考えている地域においては、そういうことを含めて中身を議論するほうがよいのではないかと考えます。

に嬉しく思います。常々たくさんの方の学生を受け入れて感じますのは、来たときと帰るときとの表情が全く違います。大学、高校、義務教育のいずれにしても、西村先生がおっしゃるように先生対生徒、学生の教育のあり方はいま限界にきており、教育のアクターは地域住民や行政マンなど、いろいろな人が参画していかないと、真にこれからの主権者といえますか、社会に参画していく人づくりはできないと思つています。

学生は地域に入つていろいろなアクティブラーニングを行います。そのなかで大事なポイントとして、地元の高校生と意識して交流させています。都会の大学生と地元の高校生が交流するといろいろな刺激を受けます。ワークショップをさせると大学生はプレゼンテーションやディスカッションの能力が高いので、高校生にとってはロールモデルとして憧れの対象となり、勉強意欲も高まります。逆に都会生まれ、

都会育ちの学生は自宅（実家）から大学に通いますが、対馬の生徒は離島の運命^{さだめ}から15または18の春に親元を離れざるを得ないため、自分の将来を真剣に考えています。それを知った大学生たちは、自分は将来のことをあまり考えていないのではないかとすることに気がきます。先生と学生だけでなく、複数の主体が一緒に学び合うという教育のあり方が必要なのだろうと思つています。

分校の話ですが、私は立教大学出身で、明治大学には六大学野球でいつも負けているので複雑な思いです（笑）。かつてはいろいろな地方自治体が、大学の誘致を頑張っていました。いまは大学を誘致できたとしても、少子化の流れで閉校しなければなりません。今後自治体が負担を背負い、ハードとして大学を設置するのは非常に難しいと思います。2018年から大学生の数は減少していきまますし、特に地方の大学

士)の大学とも連携することが大事だと思えます。ここで誤解があるといけませんので補足します。川口幹子さんの旦那さんはとても素敵な男性です。どうかご安心ください(笑)。

(*5) 沼田博幸「地方自治体の大学誘致政策と大学の発展
「ついで」京都大学公共政策大学院リサーチ・ペーパー
[http://www.sg.kyoto-u.ac.jp/jp/pdf/programme/
researchpaper/2016/04.pdf](http://www.sg.kyoto-u.ac.jp/jp/pdf/programme/researchpaper/2016/04.pdf)」

3. アグリパークプロジェクトと 若年層の還流

川井・桑原先生にはアグリパークプロジェクトのお話をしていただきました。そのなかで域学連携と大学生の還流による効果も示されましたが、前田さんのご報告にもあったとおり、学生宿舍の梅香荘を運営するウメさんのように、まさにアグリパークプロジェクトに学生たちが入ってくる拠点づくりのようなものが、域学連携ですできていたから、あの活動に発展し

マ講義をさせていただいたのですけれども、高校生にもどんどん参加してもらいたい。アグリパークの活動には明治大学、立教大学などの学生が参加していますので、子どもたちが憧れの東京の大学生に触れ合うことにはものすごくインパクトがあります。そういうことが継続できたら、子どもたちにとっても、対馬っていいところだなという希望の芽が見えてくるのではないかと思います。

最近、対馬の親御さんたちは、大学がないから子どもたちが島から出るのはやむを得ませんが、帰ってこなくていいよといって送り出してしまっているのです。ということは、子どもが帰りたいと思っても、親が帰れない雰囲気になっているのではないか。このあたりも域学連携によって親御さんたちの意識を変えられる可能性があるのではないかと思います。そしてアグリパークの意味も、もっと拡がっていくのではな

たと思います。それも踏まえて桑原先生からご意見をいただけますか。

桑原直行(以下、桑原)・当初アグリパークプロジェクトは、高齢者が生きがいを持てるような場をつくろうという目的で始まりました。

実はアグリパークがある久田地区は、転勤族の方も子どもも多いので、高齢化率がさほど高くありません。今の子どもたちに時々話を聞くと、食べ物がどのようにしてつくられるのか全く分かっていないのではないかと思うことがあります。それならばお子さんにも一緒に参加してもらい、遊びながら農業に触れて、食べ物をつくるのがどれだけ大変なのか、食育的な教育も含めて何か伝えられるのではないかと考えました。昨年は子どもの参加は少なかったのですが、今後は小・中学生にも参加してほしいと思います。

先日、域学連携の一環で、対馬高校にて一コ

いかと考えています。

川井・桑原先生が考案されたアグリパークですが、特に学生たちが入ってきて、町のお年寄りたちと触れ合うようになったときに、なんとなく町の雰囲気の色づき始めたというか、かなり変わってきたイメージがあります。そのあたりはどうお感じになりますか。

桑原・先ほど前田さんも学生宿舍の梅香荘の話をしていましたが、域学連携で宿舍を使う前は実は私はウメさんの家に往診していました。膝が悪く、歩くと息切れがするから診療所にも行けない状態でしたが、いつの間にか電話で「ああ、私これから行くから大丈夫」と話すぐらいに変わってきました。学生さんに刺激を受けてどんどん元気になっていったようです。私は以前秋田におりましたが、介護施設のボランティア活動を医学生と一緒にやっていました。介護施設の高齢者の方たちは夢も希望もないような



桑原 直行氏

感じて暮らしているのですが、若い学生さんが入ると私が往診に行くよりもみんな元気になってくるのですね。若い人、孫みたいな人たちがいろいろ面倒をみてくれるということで、逆にこんな状態では駄目だ。私たちが孫の世話をするんだ、みたいな雰囲気が出てきてだんだんと元気になります。そこで、アグリパークもまだ一か所しかありませんが、このような活動が少しずつ広がってゆくと、町全体としても明るさが見えてくるのではないかと思っています。

川井…ありがとうございます。アグリパークはその名前のとおり、農業を基軸にした町づくりという発想です。一次産業、農林水産業すべてですが、後継者がいないことで苦しんでいる。産業再生の観点からも、地道な活動ではありませんが、取組みの効果は出てきたのではないかと思います。

4. ソフトなインフラの活用

川井…当研究所理事長・内藤邦男は元農水官僚として、中央で政策に携わっておりました。この一連の活動を通じて思うところを、一言お願ひいたします。

内藤邦男（以下、内藤）…私はこのセミナーのタイトルを見たときに心配した一人で、「地域包括ケア」に「域学連携」と「若者の還流」とは、若い人を地域に連れてきて高齢者の世話をしてもらおうということなのか、これは大変だと思っ

けです。高齢者のお世話は誰にとっても負担がお金もかかりますし、精神的にも辛く、皆さん苦労ばかりで大変な世界であったわけです。いまお話を聴いていると、高齢者は若い人と接触することで元気になり、きちんと動けたり働けたりするようになるし、若い人は高齢者からいろいろな知恵や気付きを得て、人との付き合い方が自然とわかってくる。

私はいまの若い人というのは、AI（人工知能）の発達により、自分はいったいどのような職業に就けるのか、どのような仕事ができるのかとても不安になっていると思います。単に知識を使うだけの仕事はたぶんなくなり、AIに置き換わっていく。そうすると人との接触のなかでは、同じパターン、同じことは起きませんからその都度考えて対応しなければいけない。いかに人と接触し、うまく乗り越えていくかという能力と技能とスキルがないと、たぶんこれ



内藤 邦男

た明治大学が一步踏み出してくれたことは嬉しいかぎりです。都市部にある大学が地方でこういう動きをするには負担が大きく、これまでハードルが高すぎました。ハード重視で考えたらまず予算ありきになってしまおうのですが、地方財政はどこもひっ迫しているので、地方自治体からお金をもらって何かをするという発想にはなりません。それならば大学がお金を出すかというのと、いきなり未来への見通しもなくハードにお金を出せるわけがない。そうすると、都市部の大学が関与すべきことではない、現実的ではないという話になってしまうのが当然の結果でした。

ただ、今日のお話を聴いていただければ分かる通り、大きな価値の転換が始まっているということはつかみとれたのではないのでしょうか。西村先生がパラダイムシフトの話をされましたが、間違いなくこれから日本が直面するテーマ

からの若い人が世の中を生きていくのはなかなか大変だなと思います。単に知識を詰め込むだけではなく、フィールドあるいは現場に行っていることにどうすれば対応できるかがわかる、身につくということ、これからの若い人にとって大切なことだろうと思いました。

そういう意味では、地方に大学の校舎や施設をつくれればよいのですが、これまで大学誘致というのは土地を提供します、建築費は補助します、運営費についても面倒を見ます、要するに建物や施設さえつくればそれでOKだったわけです。そうではなく、大学生を受け入れて地域の人とコミュニケーションをしてもらい、そこから大学生が学べるような環境をつくっていくかないと、おそらく大学が地方に出ていく意味はほとんどないと思います。

いま、対馬はある意味いい形ができてい

けですけれども、たぶん当初は、このような形になるかどうかは想像できなかったと思います。取り組みながら初めて、こういう形が一つのあり方として見えてきた。これをいかに発展させて、多くの大学、多くの大学生がこの場を活用していけるかということが、これから非常に重要になってくると思います。そういう意味ではうまくいっている事例としてもっと発信して、ソフトなインフラとして活用してもらいたい。明治大学の試みは一つのエポックメイキングになるだろうと思いました。

川井…まさにいま内藤理事長がおっしゃったとおり、仕組んでできたことはほとんどないですね。走りながら、悩みながら、出たとこ勝負というところが結構あったと思います。特に比田勝市長は一番苦労されていますが、試行的な取り組みを重ねながらいろいろな可能性を確実につかみ取っていくことが大切かなと思います。ま



高木 英彰

は、いままで経験したことのないような人口急減、超高齢化とどう真正面から対峙するか、あるいは、その現実と向き合っただけのような新しい価値をつくりだしていくのか、ということになるだろうと思います。

これまでのお話を通して、このJA共済総研のプロジェクトを試行錯誤しながら引つ張ってきてくれた若手研究員、高木英彰からも一言お願いします。

5. 健康寿命の延ばしかた

高木英彰：私自身もこれまでの経歴のなかで、地方にどっぷり住み込んだという経験がそれほどこないため、恥ずかしいから表に出しませんけれども、学生と同じぐらいの感動を受けているというのが、この対馬に入ってから経験でございます。アグリパークに関しては、どちらかというと学生と同じ目線で、地域のために、地

域の人たちにとってどのような効果、役割を果たせるのかということを考えておりますので、私が大学教育について語れることはあまりありません。私はむしろ桑原先生がおっしゃったように、やることや楽しみがない高齢者の元気を取り戻すため、ぜひとも外に出てもらう。それで少しは健康寿命を延ばしてもらおうというような発想のなかです。おすすめです。と理解していただきます。

先ほど、アグリパークの農地のある久田地区について話がありましたが、ここでは農地を所有している方もいらっしゃるのですが、普段から体を動かす機会がある。一番問題なのは市役所の周辺にある巖原地区の方々です。ここはもともと城下町ですので農地がない。そうすると仕事をリタイアしてやるのがなくなった方々をどうやって外に連れ出すか、引きこもらせないかということが課題になったと認識しております。

先生方にお伺いしたいのは、やるのがないと思っている、誘い出してくれる人がいない方々をどうやって外に連れ出せるのだろうかというのが今後の課題という気がしておりますが、何かお考えがあれば教えてください。と、思っております。

桑原：これは一番難しい問題だと思いますね。例えば在宅医療に関する講演会を開いても、興味のある人しか集まりません。興味のない人を如何に啓発していくかは、非常に難しいと思います。2017年11月に収穫祭を行いました。ピラを配り、ケーブルテレビで宣伝しましたので、近隣の人たちも何かをやっているなど意識は確かにあるのですが、参加はしていません。ところが収穫祭をやることによって、「じゃあ、行ってみようか」「おもしろそうだね」「来年は参加してみようかな」といった雰囲気が出ていますので、楽しみのあるイベントで引

張り出すというの重要なのかなと思います。

西村…「2…6…2の法則」と呼ばれる経験則があります。すなわち放っておいても楽しみを見つけて活動する人が二割、普通の人々が六割、いくら言っても何もしない人が二割。最後の二割の人たちをどうやって外に連れ出すかということであるいろいろ苦労しています。

皆さん、お医者さんに行くことと優等生的なことを言います。ところが介護保険では、例えば理学療法士や訪問看護師といった職種の人たちがどんどん増えています。ところが、本当にかわいそうだと思うのが、お医者さんのいうことは聞くけれども、そうでない職種の人たちのいうことには値打ちがないと思っている人が多いことです。そこで多職種でチームを組み、チームケアを通じて信頼関係をつくり、それが発展している、地域における介護予防の取組みが急速かつ全国的に増えてきています。

連れてくるのが、引きこもりを減らす一つの方法ではないかと思えます。

川井…全く同感です。西村先生がおっしゃる通り、志をもって困難に立ち向かってくれるような先生というのは、そんなに多くありません。桑原先生もおひとり、私は秋田で活動していた桑原先生が対馬に来てくだされば、まったくなシステムをつくりあげてくれるだろうという期待を持っていました。だからこそ、来ていただいた以上、われわれも全面的に協力しながら、島を挙げてバックアップしていかなければいけないという思いでここまで走ってきたのです。

6. 新しい移動システムづくりの試み

川井…先ほど西村先生から、健康に暮らしていくためにはできる限り車を使わないこと、というお話がありました。西村先生にも対馬に行っ

つまり変な言い方ですが、要介護度は重いほうが年寄りらしくて偉いと思うような雰囲気はだいたい変わってきました。くだいようですがいままでは、年を取っているのに元気すぎると非難されたり、私も周囲に病気と思われたりと考えたりするような雰囲気があり、要介護認定を受けたのにサービスを一度も利用していない方が結構いたのです。今は本当に境目で、運動して少しでも元気に暮らすほうがよいと思うようになってきました。

私も年を取ったので毎日のように経験しますが、ある日元気である日元気がない、この繰り返しです。ところが桑原先生のようなお医者さんと付き合うとそういうことが分かってもらえます。病気のときだけ病院に行くと、お医者さんはこの人はずっと調子が悪い人かと思って治療します。そうではない環境をどうやってつくるか。私は桑原先生のような人を何人か地域に

ていただいたのでお分かりになると思いますが、アグリパークは市街地の中心部からちよつと離れたところにあります。ある程度ご高齢になつた方々に参加していただくためにも、移動手段というのは島の大きなテーマではないかと思えます。特に鉄道が走っていない島なので、公共交通機関で移動するとすればバスかタクシーか船しかありません。

先ほどの比田勝市長のご報告にもありました。が、集落間の距離もあり、お互いに交流できるようなインフラが整っていないような感があります。そこで西村先生には新しい移動システムづくりについて、難しい問題ですが、その点についてお考えをお聞かせいただけないでしょうか。

西村…交通手段の工夫は必要です。例えば古い表現ですが、乗り合いバス。今でいうなら希望するところまで乗り付けてくれるオンデマンド



バスがあります。でもそうではなく、住民がある程度歩けるように、地域にバス停をたくさん設置するほうがよいと思います。ただ先ほども申しましたように、地域で全て賄うのは難しいですから、例えば道路の整備は地域でお願いいたしますという方がよいと思います。交通手段に対しては補助金を得るか、自動運転といった新しい試みに取り組むことが考えられます。

川井…いま西村先生が自動運転について触れてくださったので一言。この間、明治大学に「自動運転社会総合研究所^(※6)」が立ち上がり、2018年4月から動き出すのですが、実は対馬が実験場所のひとつになっています。大学の研究機関や産業界が入ってきて、実際に実験都市として対馬に自動運転のモデル社会ができたから、日本の他の地域、特に中山間地域の交通手段の問題解決に役立つのではないかと思います。これまでの議論をお聴きになって、内藤理事

長からも一言お願いいたします。

内藤…新しい移動システムの試みについては、今後創設される見込みの「規制のサンドボックス^(※7)」制度を活用して、地域のなかで生まれるいろいろなアイデアを活かし実践するのも一案ではないでしょうか。そうするとまたいろいろな人々がやってきて、いろいろな知恵を出してくれます。対馬市がこれだけまとまっていれば、地域限定型のサンドボックスの広報にもなると思いますので、ぜひご検討いただければと思います。

(※6) 明治大学研究・知財戦略機構ウェブページ <https://www.meiji.ac.jp/oshi/topics/2017/615h7p00000wmc10.html>
 (※7) 現行法の規制を時的に止めて特区内で新技術を実証できる制度。ドローン飛行や自動運転といった先端技術の実証実験を円滑に進めることができる(日本経済新聞)2017年5月15日。政府は同制度の創設を含む「国家戦略特別区域法の部を改正する法律案」を第166回通常国会に提出している。なお「サンドボックス」とは「砂場」つまり自治体や民間事業者が、子どもの砂場遊びのように自由な発想をしながら、かつ安全性に十分配慮したうえで、実証実験に取り組めるようになることを意味する。
 首相官邸 国家戦略特区ウェブページ http://www.kantei.go.jp/jp/headline/kokkasenryaku_tokku2013.html

7. 学生が域学連携に参加する意義

川井…そろそろ質疑応答の時間に入りたいと思います。その前に、これまでのディスカッションを振り返っていただき、まずは前田さんから、この会場に集まってくださっている方々に向けて、対馬市の願いや思い、あるいは域学連携の実践からこのようなところを注目してほしい、期待してほしい、あるいは手伝ってほしい、といったメッセージを発信してもらえないでしょうか。

前田…川井さんのご質問の趣旨と合うかどうか分かりませんが、西村先生のお話にもあった食のことで思い出しました。男性や高齢者も食べられるためには台所で動くことが非常に重要とのことでしたが、最近の学生も料理が得意ではありません。何度も例に出てきましたが、梅香荘の85歳のおばあちゃんは、学生を受け入れるにあ

たり、最初は「学生の賄いなんてできないよ」と言っていました。しかし昔は40人分の食事を提供していた人です。台所で学生がもたもたしているのを見かねてつくってしまいました。学生の食事をつくっているうちにどんどん元気になるっていくおばあちゃんの姿を見ると、やはりいまの社会は人口構造的にいびつで、これから社会を変えていくためには全世代がある程度そろっている状態にすることが大事だと思いました。

しかし全世代を定住人口として固定するのはなかなか難しいです。現在対馬には、交流人口や関係人口として学生が年間約600人来ていますが、その人数を365で割ると常時数人の学生が対馬にいる計算になります。健全な社会を維持するためには若い世代が地域に入ることが大事です。皆さんにはこの機会に、対馬に関心を持っていただき、ぜひご来島いただいたり、

参加学生A・・対馬には2017年9月に島おこし実践塾に参加してから、合計四回行かせていただいています。参加のきっかけは、昨年度大学で川井先生の授業を受け、そのなかで対馬について何度か触れていて、少しずつ魅力を感じたことです。

出身は岩手県ですが、普段は資本経済が中心の東京で暮らし、対馬に行けば人との交流が中心の生活になるので、行くだけで貴重な経験をさせていただいていると常々思います。

大学生として最も言いたいことは、やはり経済的な問題です。実践塾で初めて対馬に行ったときの交通費は自己負担で、大学生なので節約しようと思って夜行バスとフェリーで行ったのですが合計20時間かかり、ほぼ外国じゃないか?とつらい思いもしました。

それでも若い時期にこれ以上ない貴重な経験ができたことは、本当に大きな財産になりました

知り合いの学生がいたら送り込んだりしていただけだと思います。

川井・域学連携について、前田さんはまさに対馬で精一杯汗を流してきた方です。私が初めて対馬に足を踏み入れるとき、前田さんはすべての手配をしてくれました。そのとき、よくこれだけの人たちを一つの公民館のなかに集めてくださったなと思うぐらい、地域の人たちが集まっていて、とてもびっくりしました。前田さんのおかげで、このとき私は、対馬と一緒に協力して歩んでいく意味がある町なのだと思えたのです。

前田さんが取り組んできた域学連携のなかで、島おこし実践塾に参加した学生・A君の意見を聞いてみましょう。対馬に何度か訪問して、学生として感じたことや活動の意味のようなものを、これまでの内容も振り返りながらご意見いただければうれしいです。

た。関係人口を増やすという意味でも、一部ではなく多くの学生に対馬に行ってもらいたい。真面目な学生もたくさんいますので、なかなかずうずうしいお願いではありませんが、大学側と行政側と、いろいろな方々のご支援をお願いしたいと思います。

分校のお話も、先がけとして対馬に何回も行っていただいたのは誠に光栄なことでした。分校がどのような形になるか分かりませんが、域学連携と地域包括ケア、地域の方々のために何かできることがあれば、いつでも対馬に行つてさせていただきたいと思えます。アグリパークもいろいろな計画があるそうですので、今後も参加できればと思います。

私自身が感じたのは、対馬に行って勉強ができることも大事ですが、東京でも何か事前・事後学習ではないですけれども、いろいろできることがあると思うので、連携というものも密に



考えていければよいと考えながらお話を聞いていました。

川井・ありがとうございます。それでは次に、対馬を経験して、4月から社会に飛び出すB君からも何か一言いいですか。

参加学生B・今年の4月から社会人として働く身になる者として一言申しあげます。

多くの大学生は、大学で勉強して、アルバイトでお金を稼いで、友達と遊ぶといった生活をしていますが、内心では就職活動、社会人としてどうやって生きていけばよいのかといった不安を感じています。そしていざ就活が始まり、自分は何も考えていなかったな、では大企業に入ろうかという思考が、いまの一般的な大学生の感覚だと思うのです。

自分の人生や働き方を考える機会はなかなか日常では得られないので、対馬に行って地域と関わる、いろいろな人と話すという経験は、生

き方を考えるきっかけとして非常によいと思います。私も二度対馬に行かせていただいて、自分の生き方や考え方をまとめたり、いろいろな人の影響を受けたりできたので、とてもよかったです。思っております。

8. ESSDではなく「SSD」(?!)

川井・会場の皆さま、このような雰囲気ですから気楽に挙手していただければマイクをお渡しします。いかがでしょうか。それでは私から、医師のA先生、何か一言いただければと思います。

参加者A・私にとってこの活動は、対馬で遊ぶで、アナゴを食べる会です(笑)。このように高質な取組みをされているとは、今日初めて知りました。

今日のお話では、いまパラダイムシフトが起きてきているのだらうということが共通の認識です

が、そのときに何が求められるかというと、「野生の思考」という言葉がでてきましたが、そういうものが必要だと思えます。「野生の思考」とは基本的に文化人類学だと思っております、そうすると最初に求められるのが、何かを感じるということです。何かを感じて、何かをしようとするときに考えるという順番になっているのだと思えます。考えるにあたっては、教育と学び、エデュケーションとラーニングの二つがあると思えます。私の友人にスーダンの医療支援をやっている人がいるのですが、彼は「われわれは助けられているのではなくて、助けられている」と言っています。言葉を変えると、実は彼もスーダンに学びに行っていて、学んでいるということなのです。

私はEducation for Sustainable Developmentという言い方は、先進国がちょっと上から目線で発展途上国に教育するというような



感じがあった、実際はむしろ Learning for Sustainable Development なのだと思います。だから学生さんたちに来てもらって、未来志向で学んでもらう。ただ問題が少しあって、そうするとESDではなくてLSD(*)になってしまいますね(笑)。しかし、いったんとりつかれるとやめられなくなるぐらい魅力的という意味では、LSDでもいいのかなと思います。

川井…なるほど、興味深いご意見です。桑原先生のご報告のなかで、クロード・レヴィ・ストロースの「野生の思考」が出てきましたけれども、今回学生たちが体験しているのも、文化人類学なのか民俗学なのか分かりませんが、柳田国男風に言いますと「物心両面の生活様式(*)」を体感しているわけです。そのなかで学ぶことがたくさんあるのだらうと思います。最後にぜひ一言お願いします。

桑原…先ほどA先生は、対馬に遊びに行つてア

ナゴを食べているだけだなんておっしゃっていますが、そんなことはありません。私の発表はすべてA先生のもとにできています。在宅サービスクエアのデータもA先生から多くのヒントをいただいたものですし、実はアグリパークではカメラマンとしても頑張っていたいただき、写真をふんだんに使わせてもらっています。2017年2月からスタートしたアグリパークですが、実際われわれもいろいろな人からバックアップしてもらいながら活動できているという状況です。JA共済総研の皆様、大学生、A先生をはじめ、誰も対馬に入つて活動してくれなければ、収穫祭どころか耕作放棄地のままだったのではないかと思うわけです。本当に皆さんのお力添えがあつて少しずつ前に進めておりますので、今後ともいろいろご教示いただければと思います。

川井…それでは、これにてシンポジウムを終了させていただきます。先生方、会場の皆さま、

本当にありがとうございます。

(*) リゼルギン酸ジエチルアミドのドイツ語名 (Lyserg säure diethylamid) の略称。幻覚剤。麻薬の一種。

(*) 柳田国男(2016)「日本の祭新版」角川学芸出版(角川フイア文庫)